

## シンポジウム 1

## 少年非行と発達臨床

## 最近の非行の特徴と少年の心

橋本和明 (大阪家庭裁判所)

## I. はじめに

少年非行の動向を見ると、現代の非行は戦後第4のピークを迎えている。そして、マスコミや新聞紙上を騒がすような重大少年事件が後を絶たない。社会は「非行の凶悪化」と称して、最近の非行の深刻化を問題にしている。あるいは、「非行の低年齢化」を指摘し、現行の少年法では十分に対処できないのではないかと法改正を求める動きにもなっている。

家庭裁判所で少年の調査をしている筆者は、そのような社会の声を聞きながら、「果たして非行をする少年は凶悪化しているのだろうか」、「低年齢化の背景にはどのようなことが考えられるのか」ということを考えざるを得ない。

そこで、本論では、筆者から見た最近の非行の特徴について述べるとともに、凶悪化や低年齢化と見られる要因や背景について論じていきたい。

## II. 最近の非行の特徴

## (1) 非行動機のわかりにくさ

最近の非行の大きな特徴は、非行に至る動機に顕著に現れている。概して、少年の語る動機がすぐに理解できなかつたり、話を聴いていてもなるほどと納得できなかつたりする。決して彼らは調査官を前にして嘘を言っているわけではない。しかし、彼らの話に耳を傾けていると、「この動機は目の前にいるこの子の口から発せられたものであろうか」、「この少年の心の中にそのような動機が犯行時に果たしてどこまであったのだろうか」と疑いたくなる。もっと言

うならば、警察などに捕まってから考え出した『後付けの動機』とでもいうような面が見られるのである。

また、余りにも少年が口にする動機が薄っぺらく軽いものであるため、「そんな動機でこんな大きな事件まで起こすのか」と不可解に思うことさえある。つまり、行為の重さと動機の希薄さが釣り合わないのである。

## (2) 精神的な未熟さが顕著であること

次の大きな特徴は、精神的な未熟さが指摘できる。

それを示す1例を上げると、万引きと強盗の区別ができない少年が増えていることである。以前なら盗むに際して、店員の間を窺い、コッソリとポケットや衣服に商品を隠していた。しかし、最近は店員の動きや防犯カメラなどお構いなしに堂々と商品を盗む。ひどい場合は、“カゴダッシュ”とあって、買い物カゴに欲しい商品を一杯詰め込み、出口から強引に走って取る手口も蔓延し始めている。そして、店員から呼び止められても応じず、制止を振り切って強引に逃げるような対応をすると強盗に発展し、そこで店員が怪我でもすると強盗致傷となつてますます法定刑が重くなる。

このような少年に共通するのは、「モノは見えていても、人は見えていない」ということである。だからこそ、盗みが発覚した時も、被害者に謝ろうとの考えがまったく思い浮かばず、自分勝手に強引な対応をしてしまいがち。少しでもそこに人が見えていれば、「もしかすると謝れば許してくれるのではないか」との淡い

期待を抱き、謝罪の言葉を口にできたかもしれない。現代の子どもは、それさえもしようとしないうえが増えている。それだけ対人関係が希薄であると言わざるを得ない。そして、“人”よりも“モノ”を重視し、抑制のきかない衝動性が彼らの中に渦巻いている。これらの背景にあるのは、まさに精神的な未熟さと言えよう。

### (3) 漠然とした不安感が背後にあること

三つ目の特徴として、漠然とした不安感が背後にあることが挙げられる。

思春期にいる者は、子どもから大人への移行期を乗り越えるため、大なり小なり、悩みや不安を抱えている。その内容は進路や性などさまざまであり、時には「自分は何者だろうか」といった自我同一性の問題で悩む者もいる。しかし、最近の少年はそのような具体的な悩みではなく、もっと漠然とした不安感を抱えていることが多い。例えば、「いじめられたり、仲間はずれにされるのではないか」といったことを考えている子どもは意外に大勢いる。実際にいじめられた経験がなくても、彼らはそのような大きな不安を抱えやすい。別の言い方をすると、いつ自分がいじめても、逆にいじめられてもおかしくない、被害と加害の境界が曖昧な感覚を持っていると言える。

インターネットで自殺サイトにアクセスしたり、リストカットやクスリを飲むなどの自傷行為をする者も後を絶たないが、彼らも漠然とした大きな不安感を背後に持ち、生と死への境界の曖昧な感覚があると指摘できる。

## Ⅲ. 「キレル」少年の特徴

上記のような特徴を持つ最近の非行少年であるが、それが如実に出ているのが、一昔から騒がれ今やその言葉も定着した「キレル」少年である。

彼らは、一旦「キレル」と自分ではコントロールできない行動に支配され、過激な暴力を振るってしまうが、時間が少し経ち、場面が変わるとこれまでのことがなかったかのようにケロツとして、平気で振る舞う。

「キレル」少年の特徴は、次の3つが上げられる。

- i. 「恨み」とは違う暴力のメカニズムがある
- ii. 対象との分離に情緒が伴わない
- iii. 対象を喪失する不安が強い

これらの特徴を考えるうえで、「キレル」少年の対象関係について少し考えてみたい。

通常は誰しも心の中に重要な人物がおり、目の前にその人がいなくても自分を支えてくれたり、叱ってくれたりする。しかし、「キレル」少年の心の中には、そのような対象が存在せず(存在しても明確な対象とはなっておらず)、極めて未熟な対象関係しか持っていない。それは、言わば、乳児のような対象関係にも似ている。乳児の対象関係は、目の前に養育者(通常は母親)がいると安心できるが、そうでないと心の中に養育者という対象が薄れたり消えてしまうため、不安になって泣いたり、時にはパニックに陥ってしまう。そして、養育者が再び乳児の前に現れると、心の中に対象を呼び戻し、機嫌を戻す。乳児はこのようなことをくり返しながら、心の中に対象を確固たるものにしていくのである。「キレル」少年の対象関係は、ある意味ではこの乳児の未熟な対象関係の段階にとどまっていると考えられる。

そのことを踏まえて、上記の特徴を見ると、iの点は、「キレル」少年の場合は、暴力事件を起こしたとしても、相手に対する恨み辛みの根深い感情はなく、突然に衝動的となって暴力を振るってしまう。そして、我に返ると暴力を振るった相手と、何事もなかったかのように平気で話をしたりもするのである。その点で、「恨み」から生じる暴力と根本的に違っている。「恨み」は心の中の対象に対して、ネガティブな感情を投入し続けるのであるが、「キレル」少年にはそのような対象関係がそもそもないため、「泣いたカラスがもう笑う」ではないが、先にあった感情をすぐに忘れてしまう。別の見方をすると、自分の行いに対する振り返りに乏しく、反省も深まらないといえるかもしれない。iiの点は、確固とした心の中の対象がないだけに、その対象と分離する際にそれに見合った喪失感が伴わないのである。例えば、恋人との別れの場面を考えるとよく理解できるが、恋人との深い情緒的な結びつきがあるために、別れに際し

て文字通り、「切ない」とか「やり切れない」という思いが残る。この言葉で表された感情は、対象とのつながりがあればこそわき起こるものであり、「キレる」少年の場合はなかなかそれをもちにくい。最後に、iiiの点では、確固たる対象が持てないばかりに、目の前にその対象がいなくなると、心の中の対象が薄れたり消えていく不安が極めて強くなる。これは先に述べた乳児の対象喪失時のパニック状態にも通じる点であり、最近の非行の特徴の一つである「漠然とした大きな不安感」との関連が大いに考えられるところである。

#### IV. 発達の視点から見た教育や処遇

以上に見てきたように、最近の非行少年の特徴に共通することは、発達的な問題が色濃く現れていることである。「キレる」少年の対象関係のところで述べたように、言わば乳児のような未熟な対象関係の発達しかなされていいため、人とのつながりの大切さや人と別れることの悲しさや切なさがわかりにくい。

近年、広汎性発達障害と非行との関係が注目されている理由に、上記のような最近の非行少

年の特徴がコミュニケーションの障害がある広汎性発達障害者（児）とどこか重なり合う部分があることも一因のように思えてならない。

いずれにせよ、最近の少年に対して、何よりも大切な視点は発達の観点から非行を捉え直し、処遇を考えていかねばならないことである。

これまで少年院などでは矯正教育が施されてきたが、“矯正”という言葉が示すように、性格や行動傾向などの誤りや欠点を直して正しくすることがそこの主体であった。しかし、これまで述べてきたように、余りにも精神的に未熟で、発達途上にある少年に対しては、“矯正”というよりも、“育成”という面を重視していかねばならない。つまり、何かできあがったものを修正していくというのではなく、まだ何もなかったところから育てていくという視点がこれからの少年の教育に求められるのである。

そして、理想論を言えば、処遇に際して、当該少年が現在はこのような発達段階に停滞しているが、今後はこのような関わりや指導をしていけば、ここまで発達が期待されるというような発達曲線が描けるような処遇がなされていくことを目指していかねばならないのである。